W-3-2　琉球祖語における非狭母音 *e, *o の再建の再検討

中澤　光平（信州大学）
kohein@shinshu-u.ac.jp

要旨

本発表では，*medu「水」，*kusori「薬」のように，日本語の i, u に対応し琉球祖語あるいは日琉祖語で非狭母音 *e, *o が再建される形式について，音環境を考慮すると再検討を要することを論じる。

1. 問題の所在

琉球諸語では中央日本語（上代奈良語 (OJ) や中古京都語に代表される言語）の母音と複雑な対応があることが知られ，甲類（Ci_1, Co_1）と乙類（Ci_2, Co_2）との関係が疑われたが，有坂（1934）以来，琉球祖語（琉球諸語の直近の祖先となる言語。PR）あるいは日琉祖語（日本語および琉球諸語の直近の祖先となる言語。PJ）に *Ci (, *Cui) と *Ce (, *Cəi), *Cu と *Co を建てる立場が，琉球語研究者を中心に増えている（以上，柳田 1999 : 16–18 に基づいて発表者が要約）。例えば，服部（1979）や Pellard (2013) では (1, 2) のような形式を琉球祖語ないし日琉祖語に再建している。

(1)　a.　*pi《日》，*pi《火》，*pira《坂》，*miti《道》，*kinu《衣服》
　　b.　*pedi《肘》，*peru《にんにく》，*medu《水》，*kezu《傷》　　（服部 1979 より）

(2)　a.　*mukae ‘to face’, *mukade ‘centipede’, *uma ‘horse’, *{u,o}su ‘mortar’
　　b.　*moNki ‘wheat’, *moko ‘bridegroom’, *omi ‘sea’, *kusori ‘medicine’　　（Pellard 2013 より）

これらの再建形の根拠となるのが，琉球諸語で日本語の i, u（上代語の i_1, u）に大きく 2 つの対応が見られることである。具体的には次のような対応である。

表 1　PJ *i と *e の反映

OJ	<	PJ	>	PR	>	奄美	::	沖縄	::	宮古	::	八重山	::	与那国
i_1	<	*i	>	*i	>	ʔi, N	::	ʔi, ʲi, N	::	ɿ, ɯ, s, N, Ø	::	ɿ, N, Ø	::	i, N, Ø
		*e	>	*e	>	ʰɨ, i	::	ʰi, i	::	i	::	i	::	i

表 2　PJ *u と *o の反映

OJ	<	PJ	>	PR	>	奄美	::	沖縄	::	宮古	::	八重山	::	与那国
u	<	*u	>	*u	>	ʔu, N	::	u, N	::	u, N, Ø	::	u, N, Ø	::	u, N, Ø
		*o	>	*o	>	ʰu	::	u	::	u	::	u	::	u

（Pellard 2013: 84–85 より）

一方で，対応と音環境との関係については，Whitman (1985) や Pellard (2013) で一部論じられているものの，十分検討されてきたとは言えない。

松森（2021）は，沖縄語首里方言における Nsu「味噌」，Nni「胸」のような，鼻音で始まり狭母音を含む音節の撥音化（主母音の脱落）について，後続音節の音節主音が狭くない母音（*a, *o, *e）の場合に生じることを指摘し，それを元に（北）琉球祖語の祖形再建と母音の音価推定を試みている。表 1,

表 2 のように，撥音化は北琉球でも南琉球でも狭母音を再建する根拠となる音変化のため，撥音化が条件変化であるとすれば，表 1，表 2 の対応に基づく祖形再建にも見直しが必要になる。

2. *e, *o が再建されてきた語

日本語の i, u に対して，これまで琉球祖語に *e, *o が再建されてきた語は次のものである。

(3) a. *peNsi【*peNti か】「肘」，*peru「大蒜」，*meNtu「水」，*keNtu【*keNsu か】「傷」，*eNtu「何れ」，*memeNsu「蚯蚓」，*erə「色」，*neNkə-「濁る」，…

b. *moNki「麦」，*moko「婿」，*omi「海」，*kusori「薬」，*ori「瓜」，…

（五十嵐 2021: 21 より）

(3a) について，Whitman (1985) は *e が基本的に「有声子音＋狭母音」の前にのみ現れることから次の変化を想定する。

(4) PJ *ə > PR *e, OJ i_1 / ____$C_{[+voiced]}V_{[+high]}$

これには OJ to_2ri (< *təri)「鳥」，OJ no_2ri (< *nəri)「海苔」のような例外がある（Pellard 2013）。一方で，*e が基本的に「有声子音＋狭母音」の前に現れるという指摘自体は，言及がない *o を含めて妥当なように思われる（(3) の 14 例中 10 例が当てはまる）。

狭母音の前の狭母音が非狭母音と類似の特徴を示すことは，上野（2003）や松森ほか（2012）でアクセントの共時的・通時的現象で指摘されており，さらに無声化や有声化といった分節音の変化にも関わる（宮島 1961）。そのため，松森（2021）のような対応が，南琉球諸語にも見られるかを確認する。

2.1. 南琉球諸語と *e の再建

南琉球の宮古語伊良部島仲地方言（富浜 2013）と多良間方言（渡久山，セリック 2020）では，*mi と *me が次のように対応する。

(5) a. 伊多 am < *ami「網」，伊 tsïm 多 kɿm < *kimi「黍」，伊 mtąsï 多 mtasɿ < *mitas-「満たす」，…

b. 伊多 ami < *ame「雨」，伊 tsïmi 多 tɕimi < *tume「爪」，伊多 mipana < *mepana「顔」，…

そのため，伊多 mim「耳」からは *memi が再建されるが，北琉球伊江島方言（生塩 2009）の (6) の対応と niɲi:「耳」から，*memi が琉球祖語形としては否定される。

(6) a. ʔani「網」，tʻʃini:「黍」，ntʻʃaʃuŋ「満たす」，ndʒatʼʃuŋ < *migak-「磨く」，…

b. ʔami:「雨」，simi「爪」，migujuŋ < *megur-「巡る」，mindzaːʃa < *medurasi-「珍しい」，…

伊江島方言の ni は *mi に対応し *me には対応しない。従って，伊良部島仲地方言と多良間方言の mim の第 1 音節は，*mi がそのまま保持されたものと考える。

この他, 伊良部 pizï 多良間 pidzɿ と伊江島 tʻiʒi「肘」の不一致（に相当する内容）については服部（1979）で論じられていて，伊良部 pinza 多良間 pinda : 伊江島 tʻitʼiʒa「山羊」の不一致についてはローレンス（2019）で論じられているが，服部（1979）は *pedi > *pidi の同化，ローレンス（2019）は借用のためと，それぞれ異なる説明をしている。しかしながら，これらも *pidi, *pipiza で後続の狭母音の影響によ

る例外と考えれば，統一的な説明が可能となる。

このように考えると，次の例は，*i の変化が後続の狭母音によって阻止された結果，見かけ上非狭母音に見える対応ではないかと思われる。

(7) 伊良部島仲地方言 **i̲**n（×n:）「犬」，**i̲**ᶻï（×ᶻï:）「錐〈ｲﾘ〉」，**i̲**ᶻï（×ᶻï:）「西〈ｲﾘ〉」，n**i̲**vkam（×nvkam）「遅い〈ﾆﾌﾞｲ〉」，p**i̲**tsï（×pï̥tsï）「櫃」，m**i̲**:tsï（×m:tsï）「右」，m**i̲**ᶻï（×mᶻï:）「海松」，多良間方言 n**i̲**sɿ（×nsɿ）「北〈ﾆｼ〉」，m**i̲**tsɿ（×mtsɿ）「道」，石垣方言（宮城 2003）kï̥tsï（×kï̥tsï, ×kï̥sï）「崖〈ｷｼ〉」

実際,「道」は伊良部島仲地方言では mtsï,「右」は多良間方言では mɿ:gɿ,「海松」は石垣方言では bï:rï など，ある方言で非狭母音のような対応を示していても，他の方言では狭母音の対応を見せる例がある。与那国方言（池間 2003）の tʃ**i̲**ri（×tʃi）「霧」，tʃ**i̲**ru（×tʃu）「汁」，tʃ**i̲**rutʃi（×tʃutʃi）「印」などは狭母音に対応するものの，tsan「虱」，tsu:「白」などと同様の変化が生じていない点で，後続の狭母音の影響による変化の阻止が想定される。

2.2. 南琉球諸語と *o の再建

伊良部島仲地方言と多良間方言では，*ku と *ko が次のように対応する。

(8) a. 伊 fuzï 多 fugɿ < *kugi「釘」，伊 fuzï 多 fudzɿ < *kugi「籤」，伊多 fumu < *kumo「雲」，…
b. 伊 kωsï 多 kusɿ < *kosi「腰」，伊 kωzu 多 kudzu < *kozo「去年〈ｺｿﾞ〉」，…

そのため，伊 kωzï 多 kudzɿ「澱粉〈ｸｽﾞ〉」からは *koz{u,i} が再建されるが，北琉球今帰仁方言（仲宗根 1983）の (9) の対応と κuzii「澱粉」から * koz{u,i} が琉球祖語形としては否定される。

(9) a. κuzii「釘」，κuzii「籤」，κumuu「雲」，κuraa < *kura「鞍」，…【※κ は k の喉頭化音】
b. hu[sii「腰」，huzuu「去年〈ｺｿﾞ〉」，hugaani < *kogane「黄金」，…

今帰仁方言の κu は *ku に対応し *ko には対応しない。従って，伊良部島仲地方言 kωzï と多良間方言 kudzɿ の第 1 音節は *ku が保持されたものと考え，琉球祖語形としては *kuzu「澱粉」を再建する。

ただし，*kuzu「澱粉」は借用語（南琉球は北琉球から，北琉球は日本語から）のために不規則な対応となっている可能性もある。

このように考えると，次の例は，*u の変化が後続の狭母音によって阻止された結果，見かけ上非狭母音に見える対応ではないかと思われる。

(10) 伊良部島仲地方言 **u̲**sï（×vsï）「牛」，**u̲**ssu（×vssu）「後頭部〈ｳｼﾛ〉」，**u̲**sï（×vsï）「臼」，**u̲**m（×m:）「膿」，n**u̲**gω:（× ngω:, ×nv:）「拭う」，n**u̲**fum（×nfum）「温む」，n**u̲**sï（×nsï）「主」，n**u̲**sudu（×nsudu, ×nsïdu）「盗人」，n**u̲**sum（×nsum, ×nsïm）「盗む」，fug**ω̲**ᶻï（×fuv:）「睾丸〈ﾌｸﾞﾘ〉」，fu̥k**ω̲**ru（×fufuru, ×fuffu）「袋」，m**u̲**sï（×msï）「虫」，m**u̲**sï:（×msï:）「毟る」，m**u̲**ssu（×mssu）「筵」，m**u̲**tsïkḁsï̥kam（×mtsïkḁsï̥kam）「難しい」，多良間方言 tsɿb**u̲**l̥（× tsɿv:）「ヒョウタン〈ﾂﾌﾞﾙ〉」，n**u̲**kɿ（×nkɿ）「貫き」，m**u̲**sɿbɿ（×msɿbɿ）「結ぶ」，石垣方言 s**u̲**kubu（×sï̥kubu, ×sï̥fubu）「籾殻〈ｽｸﾓ〉」

実際,「夕顔〈ﾂﾌﾞﾙ〉」は今帰仁方言では ciɴbu,「貫き」は伊良部方言では ntsï など，ある方言で非狭

母音のような対応を示していても，他の方言では狭母音の対応を見せる例がある。与那国方言の tʃi̠ttʃi（ˣtʃi）「煤」，tʃi̠ru（ˣtʃu）「弦〈ツル〉」などは狭母音に対応するものの，tsa「面〈ツラ〉」などと同様の変化が生じていない点で，後続の狭母音の影響による変化の阻止が想定される。

3. 考察

2 節で見てきたように，（日本語の i, u に対応する）非狭母音 *e, *o が再建されてきた (3) の他にも，*e, *o が再建されうる音対応が見られる語がある一方，それらは後続母音の影響による見かけ上の対応と考えられることを確認した。本節ではそれを踏まえ，*e, *o の再建についてさらなる考察を行う。

3.1. 動詞の音変化

後続音節の母音の影響があるとすると，動詞のように活用によって後続音節の母音が変わる場合が問題となる。

Pellard (2013) は「瓜」と「売る」が宮古語大神方言で uɯ : ʊʊ のように異なる対応を示すことから，「瓜」と「売る」をそれぞれ *ori，*ur(-i) と再建している。しかし，「売る」の場合，*ur-a-, *ur-e- のように，非狭母音の音節が後続する場合の音変化が類推によってパラダイム全体に拡張する可能性がある。そこで，いくつかの南琉球諸語での動詞の対応を (11) で確認する。

(11) 「入る」伊良部 iᶻï，多良間 ɿ:，石垣ʔiruŋ, ʔi:ruŋ ;「熟む」伊良部 um，多良間 mm，石垣ʔumuŋ，与那国 umun ;「売る」伊良部 v:，多良間 vvɿ，与那国 urun ;「切る」伊良部 tsï:, kiᶻï，多良間 kɿ:，石垣 kï̥suŋ，与那国 ts’un ;「知る」伊良部 sï:，多良間 sɿ:，石垣 sï̥suŋ，与那国 tsun ;「作る」伊良部 tsu̥fu:，多良間 tsɿffɿ, tsɿffuɿ，石垣 tsï̥kuruŋ，与那国 k’urun ;「握る」伊良部 nzï:，多良間 ngɿ: ;「貫く」伊良部 mfu，多良間 nkɿ，石垣 nukuŋ，与那国 nugun ;「脱ぐ；抜く」伊良部 nv, nuv，多良間 ngɿ, nugɿ，石垣 nuguŋ ;「吹く」伊良部 ffu，多良間 fukɿ，石垣 ɸu̥kuŋ，与那国 k’un ;「降る」伊良部 fuᶻï，多良間 ffɿ, fuɿ，石垣 ɸo:ŋ，与那国 hurun ;「剥く」伊良部 mufu，多良間 mukɿ，石垣ʔŋguŋ，与那国 mugun ;「向く」伊良部 mfu，多良間 mukɿ

方言間で異なり，方言内でも複数の対応が見られるが，多良間の iɿ「西〈イリ〉」と ɿ:「入る」のように，名詞では変化せず，動詞で変化している例がある。iɿ「西」を *eri と再建してしまうと，一般に説かれる「入り」（「入り辺」）の語源説と合わなくなってしまう。*iri と再建した上で，この環境では *i が保持されたが，動詞では *ir-a- > ɿza-（cf. ɿzara < *irara「鎌」）など非狭母音の音節が後続した場合の変化が類推でパラダイム全体に拡張した結果ではないか。多良間 tsɿffɿ, tsɿffuɿ など 2 つの形が見られるのは，狭母音の変化と非狭母音の変化の形式に由来するものと考える。与那国方言でも，名詞では tʃiri「霧」，tʃiru「汁」である一方，動詞では tsun「切る」，tsun「知る」となっていて，tsan「虱」，tsu:「白」などと同様の変化が生じていることから，非狭母音と同様の変化が，少なくとも一部の動詞には生じている。伊良部島仲地方言に v:「西瓜」があることからも，「瓜」は *ori ではなく *uri と再建すべきと考える。

3.2. *kusori「薬」について

Pellard (2013) は，次のような対応を示して，「薬」を *kusori と再建している。

表 3　*usu「臼」と *kusori「薬」の対応

	上代語	奄美			沖縄	宮古	八重山	与那国
		湯湾	古仁屋	坂嶺	今帰仁	大神	石垣	
臼	*usu*	ʔusɨ	ʔusɨ	usu	ʔuɕi	us	usɻ	utɕi
薬	*kusuri*	kʔusui	kusuɾ	sui	kʰusui	ffuɯ	ɸuɕiɾɻ	tsʔuɾi

（Pellard 2013: 86 より）

*usu の su と *kusori の so は琉球諸語で異なった対応を示し，異なる母音を再建する必要があるように見える。しかし，伊良部方言 tsu̟fu: (< *tsɨ̞fu:?)「作る」や tʃibi (< *tsɨbi?)「尻」，多良間方言 tɕimi (< *tsɻmi?) のように，前後の母音に中舌母音が同化する変化は南琉球ではしばしば見られる（北琉球でも，首里方言で有名な ts**u**kujuɴ「作る」の他 kuts**u**bi「いぼ」も同化の例と思われる）。「薬」も，先行する *ku の影響で [su] になった可能性を考慮する必要がある。さらに問題になるのが石垣 ɸuɕiɾɻ で，*kusori からどのようにして ɸuɕiɾɻ が導かれるのか不明である。*kusuri > *kusïri が逆行同化で *kusiri になり，狭母音の連続のために si の音価が保持されたという可能性もあるのではないか。*omi「海」の南琉球での前舌母音化を含め，どのようなプロセスで祖形から各形式が導かれるのかの議論が必要だと考える。

3.3. *medu「水」，*peru「大蒜」について

「水」と「大蒜」については，*medu，*peru を琉球祖語形として再建して琉球諸語との間に音対応の問題がない。そのため，これらについては，見かけ上の *e, *o ではなく，実際に [e], [o] の音価だったと推定される。もし，日琉祖語に *midu, *piru を再建するなら，次の音変化を仮定する必要がある。

(12) a.　PJ *i > PR *e / ____$C_{[+voiced]}V_{[+high]}$

　　b.　PJ *u > PR *o / ____$C_{[+voiced]}V_{[+high]}$

他の形式については，実際は *e, *o に転じていなかったと考える以上，(12) は規則的に起こった変化とはみなせない。「水」については，多良間 mnatu (< *minato)「港」，im (< *emi < *omi)「海」の他，mɻju (< *miwo)「船の通り道」（渡久山，セリック 2020: 480）など水と関連して *mi を含む形式が見られるから，「水」にも *mi を再建するのが妥当なように思われる。

3.4. その他

*piru「昼」は*peru「大蒜」とミニマルペアをなし，琉球祖語に *i と *e の区別があった強い根拠となる。*piru「昼」は与那国方言で ts'u:となるが，発表者の観察では，後続音節が狭母音の場合は *pir- > ts'- は起こらないと考えられ，語末母音が何らかの非狭母音的特徴を持っていた可能性がある。そうであれば，*peru「大蒜」とは後続母音が異なっていたことになり，ミニマルペアではなくなる。

「芋」も，*umu であれば多良間方言 mm のように両方の音節の母音がつぶれるのは却って不自然であり，琉球祖語形には *umo を再建し，*umo > *mmo > mm と変化したと考える（*-mo > *-m は先行する環境と無関係に生じたと見る）。これに関連して，琉球祖語の「重い」の再建は困難を極める（伊良部 v:kam，多良間 ifuʃa:ɭ, ivvuʃa:ɭ，石垣ʔissa:ŋ, ʔmbusa:ŋ，鳩間ʔmbo:ŋ（加治工 2020），与那国 insan）。*ubu- ~ *umu-か，複数の形式を再建する必要があるかもしれない。

4. まとめ

琉球諸語のデータが増えたことにより，これまでの再建案には見直しが必要な部分が出てきた。渡名喜方言 ɴmi「海」（比嘉 2021: 1075）は，*omi という再建を困難にするだろう。しかしデータが増えることで，琉球祖語の再建が混沌に陥るわけではないと考える。与那国方言の Nbi「尻〈ﾂﾋﾞ〉」，Nbu「子安貝」からは，本研究に基づいても，*tube，*subo の再建形が支持され，伊良部 ʃʃi-「しり」からは *sire が導かれる。多良間 ffi「イカ墨〈ｸﾘ〉」からは *kure が妥当で，「腕」は *ode で今のところ問題ない。

これから必要になるのは，Jarosz (2018) などのように，音環境を考慮した精密な音変化の考察と，伊良部 kʊ̠tsï「靴」などの対応を乱す借用語の峻別だろう。そのためにも，より多くの日琉諸語のデータが今後も提供されることが望まれる。

本発表で用いた記号

[ ] ：音声表記	- ：形態素境界	* ：再建形
< , > ：通時変化	〈 〉：対応形	× ：正しくない予測形
~ ：音声や語形のゆれ	{} ：可能性のあるリスト	【】：発表者による補足

謝辞

本研究は JSPS 科研費若手研究 21K12993 の助成を受けたものです。

引用文献

有坂秀世（1934）「母音交替の法則について」『音声学協会会報』34: 2／五十嵐陽介（2021）「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」『フィールドと文献からみる日琉諸語の系統と歴史』17–51／池間苗（2003）『与那国語辞典』与那国町：私家本／上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」『朝倉日本語講座３　音声・音韻』: 61–84／生塩睦子（2009）『新版　沖縄伊江島方言辞典』国頭郡伊江村：伊江村教育委員会／加治工真市（2020）『鳩間方言辞典』立川：国立国語研究所／渡久山春英，セリック・ケナン（2020）『南琉球宮古語多良間方言辞典』立川：国立国語研究所／富浜定吉（2013）『宮古伊良部方言辞典』那覇：沖縄タイムス社／仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典：今帰仁方言の研究・語彙篇』東京：角川書店／服部四郎（1979）「日本祖語について・19」『月刊言語』8 (9): 108–118／比嘉松吉（2021）『沖縄渡名喜方言辞典』島尻郡渡名喜村：渡名喜村／松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（編著）（2012）『日本語アクセント入門』東京：三省堂／松森晶子（2021）「沖縄語首里方言の音節構造の変化と祖語の母音の音価推定」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロソディー研究班 2021 年度前期オンライン発表会第 6 回（発表資料）／宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』那覇：沖縄タイムス社／宮島達夫（1961）「母音の無声化はいつからあったか」『国語学』45: 38–48／柳田征司（1999）「沖縄方言の史的位置（上）―「キ̀」（木）「ウキ̀」（起き）「ウリ̀」（降り）などの問題―」『國語國文』68 (4): 16–34／ローレンス，ウエイン（2019）「竹富島方言アクセント（2）」『琉球の方言』43: 97–129／Jarosz, Aleksandra (2018) ‘Innovations, distribution gaps and mirror images: The reflexes of Proto-Ryukyuan close vowels in a post-nasal position’ in: Yearbook of the Poznań Linguistic Meeting 4. pp.75–104／Pellard, Thomas (2013) ‘Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system.’ In: Frellesvig, Bjarke, Sells, Peter (eds.) Japanese/Korean Linguistics 20. pp.81−96 ／ Thorpe, Maner Lawton. (1983) RYŪKYŪAN LANGUAGE HISTORY. University of Southern California／Whitman, John (1985) “The phonological basis for the comparison of Japanese and Korean” Ph.D. thesis, Harvard University